

# 白雪姫の悩める日常

*Yuki & Yuto*

---

桜木小鳥

*Kotori Sakuragi*



エタニティ文庫

## 目次

白雪姫の悩める日常

5

ストーリーカー王子の夢見る日常

283

書き下ろし番外編

素敵なアクアリウムライフにようこそ

335

白雪姫の悩める日常

真っ白な雪に、赤い血を一滴落としたような、白い肌とバラ色の唇。物語に出てくる描写は美しいけれど、実際にそんな顔色をしていたら、ほとんどの人は病気かと思うだろう。

1

「なんだか、顔が青白いけど大丈夫ですか？」

初対面の人からそう言われることには、慣れすぎるくらいに慣れている。

「いえ、いたって健康ですの、お気になさらず」

笑みを浮かべて名刺を取り出し、相手の名刺と交換する。名刺を見た取引先の担当者は、顔を上げてまじまじとわたしの顔を見た。

その反応もまた、慣れたものだ。

「白崎、雪さん？」

「はい、芳野総合警備保障、システム課の白崎雪です」

にこりと笑って頭を下げる。表情には出さなくても、相手が頭の中をなにを思い浮かべたのか、容易に想像できた。

「へえ、本当に白雪姫だねえ。色白だし」

ほらね。初対面の相手とは、だいたいこんな感じになるのだ。

同席していた、同僚である営業担当者も苦笑している。

白崎雪、二十九歳。

真っ黒な髪に病的なほど白い肌。小さな頃から、あだ名は白雪姫。もちろん、それ以外はいたって平凡な容姿なので、お姫様感はまったくない。

なので、このあだ名はからかい半分でつけられたものだ。当然嬉しいはずがない。

ニヤニヤ笑う同僚を無視して、用意してきた資料を取り出す。打ち合わせ自体は順調だった。わたしは仕事はちゃんとやるから、こういう場でミスをすることは基本的にないのだ。

わたしが新卒で入社した業界最大手の警備会社、芳野総合警備保障。要人の警護から企業、個人のセキュリティまで、幅広い業務を扱う。わたしはシステム課に所属していて、主に警備システムの構築の提案をする仕事をしている。

「それではこれでお願います」

「ありがとうございます。では、すぐに見積書をお出しして、工事の日程の調整に入り

ます。よろしく願います」

満足げな顧客の様子に、営業担当者と顔を見合わせ、安堵の笑顔を交わす。どんなに自信がある提案でも、決まるまではドキドキするものだ。

「あー、決まって良かった。白崎さんお疲れさまでした」

「いえいえ。そちらこそお疲れさまでした」

まだこれからほかの営業先をまわるといふ同僚と別れ、一人で駅を目指して歩き出した。

三月に入って、少しずつ寒さが軽減している。今日は天気もいいせいか、ぽかぽかと暖かい。

「公園の中、通って帰ろ」

一人つぶやき、近くにある公園を目指す。道路沿いの歩道よりも、公園を歩くのが好きた。都会の中にある大きな公園では、たくさんの人が思い思いに過ごしていた。

仕事中のサラリーマンはベンチで居眠りし、小さな子どもたちは芝生の上を走っている。日中のこの時間帯は、犬の散歩をしている人も多い。

「可愛いなあ。モフモフ」

ちよこちよこと歩く小型犬も、ゆっくりと歩く大型犬も、みんな可愛い。

ものすごく可愛いけど……

「ウーーツ、ギャンギャンギャン!!」

「あらっ。急にどうしたの? ココちゃん」

小さなチワワが、わたしを見た瞬間牙をむいて吠えだした。

「すみません。いつも吠えないのに……」

「いえ、大丈夫ですから」

困惑気味にリードを引っ張る飼い主さんに笑顔を見せ、まだ牙をむいて唸っているチワワに視線を向ける。可愛いはずの小型犬が、まるでケルベロスのような。

逃げるようにそこを離れ、公園中を足早に進むも、近くの犬たちが次々と吠えたり、走り出したり……

わたしが白雪姫に程遠い理由は、ここにもあった。

壊滅的に動物に好かれない。

おとぎ話の白雪姫といえは、森の動物たちに愛されているイメージだ。有名なアニメ映画でも、彼女は小鳥やリスやら小動物に囲まれている。

それなのに、白雪姫のあだ名をもっていてもかかわらず、わたしは動物に徹底的に嫌われている。犬に吠えられるのも、猫に引っかかれるのも日常茶飯事だ。

思い起こせば子どもの頃から、カラスにはつつかれ、鳥にはフンを落とされ……。動物園に行けば、みんな檻の隅に離れていき、わずかに残った子たちには唾やらなんやら

を飛ばされる状況。

なまじ動物好きなので、余計に悲しみは大きい。

そんなふうには動物に好かれないうわしが人間にモテるはずもなく。二十九歳になった今まで、つきあった人はわずかに一人だけだ。大学時代に一度だけできた恋人は、卒業とともに自然消滅した。

恋愛に消極的なわけではないのに、出会いもないまま年月だけはどんどん過ぎる。

プライベートに潤い(うるおい)を——いや、恋人は最悪でなくてもいいけど、動物には好かれる。でも、その悩みにも最近多少の変化がある。その変化をどう受け止めていいのか、わたしは今、考えあぐねているところだ。

そそくさと公園を後にして電車に飛び乗り、会社の最寄り駅で降りた。駅から少し歩くと、目の前に巨大なビルが現れる。芳野総合警備保障本社だ。

大きな正面玄関には、屈強なガードマンが常に待機している。昨年新社長に変わってから、社内の雰囲気も少しずつ変化してきた。もちろん、いい方だ。

セキュリティチェックを受けて社内に入ると、広いロビーには大勢の人がいた。その間を縫うように、エレベーターホールに向かう。

「あ、白雪ちゃん。お疲れさま！」

突然よく通る声がホールに響き、まわりから視線が集まる。

「……お疲れさまです」

そんな視線などまったく目に入らないみたいに、その男性はわたしにまっすぐに近づいてくる。つい数か月前に他社からヘッドハンティングされてきた、営業一課の夏目祐斗(なつめゆうと)さんだ。

わたしに起こったわずかな変化は、彼の存在によって起きていた。

夏目さんは、一言でいうと王子様みたいな人だ。パツと目を引く華やかな顔立ちは、どのモデルかと思うほど整っている。百八センチを超えたりとした長身で、髪は少し長めの茶色。それが少し軽い印象を与えるけれど、仕事ぶりは真面目で、そのギャップに萌える女性が続出している。

三十二歳独身、そして恋人もいないという噂。さらに花形部署である営業一課で早々にトップの成績となったことから、社内の女性たちから熱い視線を送られている。現に今も、ホールにいる女性の視線を一身に集めていた。

「今日は声野建設に行ってきたんでしょ？ その顔は上手くいった顔かな？」

わたしの目の前まで来た夏目さんが、楽しそうに笑う。

そして本当にイケメンで、キラキラ輝く王子様みたいな人だけど、なぜか地味の見本であるわたしに気さくに話しかけてくる奇特な人なのだ。

どうしてわたしの今日の訪問先を知っているのかなんて、聞くのは愚問だ。だって夏目さんは、なんでも知っている。

「芦野建設って確か近くに大きい公園があったよね。帰りに寄ってきた？ 白雪ちゃん、公園歩くの好きだよね？」

「……まあ」

そうですね、という言葉は呑み込む。

公園を歩くのは好きなことの一つだけど、それを夏目さんに言った記憶は一切ない。夏目さんは、なぜかわたしのことをやけに知っている。お昼によく行くコンビニや、毎日飲んでるお茶の商品名とか、ほんの些細なことだけだ。

「まだしばらくは通うんではしょ？ あの近くに白雪ちゃんの好きなカフェがあるといね」

夏目さんは言いたいことだけ言って、じゃあねと爽やかに去っていった。

颯爽と歩く後ろ姿を見送っていると、どこか面白がるような男性の声が聞こえた。

「あの分だと、明日にはおすすめのカフェ、教えてくれるんじゃないか？」

——そうかもしれない。いや、確実にそうなるだろう。

そこにいた全員がそう思ったに違いない。

わたしの周囲は、面白そうな顔をした男性たちと、まあと頬を染めて楽しそうにして

いる既婚者の女性たちと、憎らし気な視線を投げってくる若い女性たちに、見事に分かれていた。

「あんなにイケメンなのに、変な人もいるもんだねえ」

ぼそっとつぶやいたのは、お掃除のおばちゃんだ。

その言葉にも、きつと多くの人が心の中で頷いただろう。

わたしは、ふうと息を吐いて、また歩き出す。途端に時間の流れが戻ったみたいに、他の人たちも動き出した。

エレベーターホールに向かいながら、もう何度目かになる同じ疑問の答えを見つけようとする。でも、一向に出てこない。

夏目さんはわたしのストーカーだ。

いや、実際は違うのかもしれないけれど、そう言ってしまういたくなるのは事実だった。わたしのなかがあの人の琴線に引っかかったのかは今でも謎である。それでも、社内で一、二を争うイケメンが、よりにもよってわたしにだけああいう態度を取るのだ。

夏目さんとは、直接なことがあったわけでもない。そもそも部署が違うので、普通に会う機会などほぼない。たまたま用があつて、営業部に顔を出したときが初対面だ。そのときに、初めましてと挨拶をした。ただそれだけ。

なのにそこから、お昼休みや移動中に出くわすことが増えた。よく行くコンビニやカ

フエでも、彼を見かけるようになる。そのたびに話しかけられ、最初はずっとびっくりしていた。けれど、会うと白雪ちゃんなんて気さくに呼ばれて、わたしもあまり悪い気はしなかった。むしろ、柄にもなくドキドキしたりしていたくらいだ。

もしわたしが人目を惹くほどの美女なら、夏目さんの行動を求愛行為と受け取ったかもしれない。けれど、いかんせんわたしは、見かけも性格も普通。白雪姫というあだ名が唯一の目立ち要素なくらいだ。華やかな夏目さんの対極にいるタイプ。なので、彼が話しかけてくるのはただの社交辞令だと思っていたのだ。

おかしいと思っただのは、いつだったか。

買おうと思っていた飲み物を、間違えて買っちゃったからと渡されたり。だれにも言っていないわたしのレストランを、夏目さんが知っていたり。

あれ？と思うことが積み重なって、そして今に至る。

夏目さんの不思議な行動には、だんだん慣れてきている。以前は、彼がみんなに対してそんな行動をとっているのかな、と思ってもいた。でもどうやら、彼のその行動は、わたしに対してだけみたいなのだ。

もしかしたら、本気でわたしのことが好きなのかしら？ と一瞬考えたけど、自分のことは自分が一番よく知っている。

動物に好かれないわたしが、人間にモテるはずはないのだ。それに、夏目さん本人から、告白めいた言葉を言われたこともない。なので、わたしは、彼のこの行動は新手的嫌がらせか悪戯、からかいの類なのだろうと解釈している。

きつとこれまで彼の近くにいなかったタイプだから、面白がっているのだろう。

ということ、そのうち飽きるはずと、あえて無関心を装っている。けれど、この対応が合っているかは自分でも疑問だ。

そんなこんなで、妙にハイテンションな夏目さんと、無反応なわたし。そしてそれを面白がっている男性たちと、既婚女性たち。からかっているだけとはいえ、面白くないと思っている若い女性たち。そんな訳のわからない構図ができて上がっていた。

面白くないと思っている女性たちに、どうしてあなたなの？ とこれまで何度か言われたけれど、その理由はわたしが一番知りたい。見た目地味なわたしは、当然ながら仕事もプライベートも地味なのだ。それなのにどうして？ なんて、わたし自身が思うくらいだから、他人が思うのはまあ当然のことだろう。

でも、夏目さん本人に直接聞く勇氣はわたしにも彼女たちにもなく、若い女性たちの歪んだ嫉妬ばかりが積み重なってきている。

普通の女の子なら、今のわたしの状態を喜ぶのだろうか。まったく知らない人とか、自分が良く思っていない人から頻繁に声をかけられたら、それはもう問題外とか、正真正銘のストーカー認定だろうけど、相手はあの夏目さんだ。



全女子社員から王子様と憧れられるような、特別な人。キラキラ笑顔の彼だから、ちょっと怖いことを言われても、一瞬嬉しくなりそうになるから恐ろしい。

王子様みたいなストーカーか……

からかい目的のストーキングをするなら、もっと可愛い女の子にすればいいのに。地味なわたしなんかよりその方が楽しいだろうし、もしかしたらその先に、恋愛面の素敵な展開があるかもしれない。いや、ストーカーに楽しさを求めてはいけなやか。でも夏目さんだから、なんでもありな気もする。

見ているだけなら目の保養になるくらいイケメンなのに。ターゲットにわたしを選んじゃうあたり、やっぱりちょっと残念な人なのかもしれない。でも顔がいいと、変なことをしてもその変態性は薄まるもんなんだなと、なぜか納得してしまった。

偽物の白雪姫と、ストーカー王子か……。まあ、人生うまくはいかないものね。

ようやくエレベーターに乗り込み、システム課のある十階のボタンを押した。扉が閉まり、ホッと息を吐く。ほんやりと操作パネルを眺めていたら、三階で止まった。

扉が開いたので壁際に下がる。視線を上げると、平凡な顔をした男性が乗り込んできた。わたしの変化の原因その二の登場だ。

「あら、鈴木さん」

「やあ白崎さん。お疲れさま」

鈴木さんは、夏目さんと同じ営業一課の人だ。

わたしが言うのもどうかと思うけど、鈴木さんはびつくりするほど平凡な人だ。あまりにも普通過ぎて印象に残らないという、ある種営業には不向きな人。一度、一緒に仕事をすることがあって以来、なにかと話す機会が多い。いや、むしろ一番よく話す人と言ってもいいかもしれない。

鈴木さんが営業一課のある九階のボタンを押し、また扉が閉まる。

「白崎さんって、今仕事に余裕ある？」

「こちらを見ずに、鈴木さんが話しかけてきた。」

「え？」

「いや、今自分が営業かけてるところ、白崎さんにシステム組んでもらえないかと思ってる」

「すみません。自分では選べないんです」

基本、営業から来た依頼を振り分けるのは、上司の采配なのだ。

「そう……、白崎さんとまた一緒に仕事したかったんだけど」

鈴木さんはつぶやくようにそう言い、黙り込んだ。見かけは普通だけど、どこか闇を纏っているような人でもある。

なんだか、ものすごく気まずい……

気まずいままエレベーターは九階で止まり、鈴木さんがそそくさと降りていった。考えようによっては、近頃、自分史上最大のモチ期が来ているような気もする。けれど、相手がからかい半分のプチストーカーとダークノーマルというあたりで、テンションはまったく上がらない。

おこがましいかもしれないけど、どうせ好かれるなら動物に好かれない。

「はー……」

またため息をつき、エレベーターのボタンを押した。閉じたドアの内側はピカピカで、自分の姿が映る。身長百五十六センチ、体重……いわゆる中肉中背で、おしゃれの欠片もないビジネススーツ姿。肩を越える黒い髪はひとつにまとめ、仕事るときはナチュラルメイクだ。ナチュラルメイクなんていえば聞こえはいいけど、実際のところは化粧映えしないから、きちんとメイクをする意味がないだけ。顔は、とにかく地味だと思う。

こんなわたしに、多少なりとも言い寄ってくれる人がいるということは、もつと喜ぶべきなのだろうか。

……いや、無理でしょ。

夏目さんからはからかわれているだけだし、どこか不穏な鈴木さんは問題外だ。

白雪姫なんて呼ばれても、わたしは普通。普通も普通。だから、贅沢ぜいたくは言わない。本当にまともで普通な人と出会いたい。

## 2

エレベーターのドアに向かって、何度目かのため息をついた。

四月を一週間後に控えたある日、社内の異動が発表された。前社長の甥おいにあたり、スィス人の血を引く新社長はなかなかのやり手と評判で、彼が社長になってから、抜本的な人事異動が度々行われている。

出社早々、玄関ホールの掲示板の前に人だかりができていた。女性たちの黄色い声が響き渡っている。声の主を見ると、わたしの所属するシステム課の女子社員たちだった。その顔はやけに嬉しそう。異動の発表でこんな表情をすることがあるのだろうか。

興味を覚え、人だかりが少なくなつたタイミングを見計らって掲示板の前まで行った。内示と書かれた紙には、大勢の名前が書かれている。今回の異動はかなり大がかりなようだ。

一番上から順番に目で追っていくと、ある名前に目が留まった。

営業一課 夏目柘斗。

「あら、夏目さんが異動？」

思わずつぶやき、さらに視線を走らせる。

営業一課 夏目佑斗 四月一日付でシステム営業部（システム課内に新設）異動。

「えっ……」

夏目さんがうちに異動？

だから彼女たちから嬉しい悲鳴があがっていたのか。

でも、あの夏目さんと同じ部署……。これまであまり顔を合わせる機会がなかったから、プチストーカー疑惑があってもそれほど気にならなかったけど、四月からは毎日嫌でも会うことになるのだ。一体どうなってしまうのだろう。

そりゃ夏目さんは目の保養になるくらい美形で、見る分には申し分ない。けれどそんな彼に、朝から晩までずーっと観察されるとしたら、それはちょっと困ってしまう。

いや、ここはむしろ逆手に取って、わたしが夏目さんを観察してみようか。そしたら、夏目さんの行動の謎も解けるかもしれない。

……ストーカーをストーカー、なんだか空しすぎる。

考えるだけで疲れてしまった。また人が集まりだったので、入れ替わるように後ろに下がった。

なんだかすつきりとしないうまま仕事をこなし、終業時刻を迎える。ここ一年、残業はめったにない。仕事の徹底的な効率化を図り、過度な残業を廃止したのは新社長の功績

の一つだ。

「お疲れさまでしたー」

だれにともなく挨拶して、会社を出る。今日は一度も夏目さんに会っていない。いや、そう思っているのはわたしだけで、彼の視界の中にはわたしが入っているかもしれないが。

思わず後ろを振り返ったり、キョロキョロ辺りを見まわした。まったく、これじゃあわたしの方が挙動不審だ。

「あー、やだやだ」

自分自身に嫌気がさしながら、駅に向かった。

まだ夜の早い時間なので、駅には大勢の人がいる。混んだ電車に乗り、最寄り駅の一つ手前で降りた。まだまだにぎわっている駅前商店街を歩き、アーケードの一番端にあるペットショップの前で足を止める。

中からくぐもった鳴き声がいくつも聞こえてきた。これはいつものこと。歓迎されているのなら嬉しいけど、たぶん威嚇だ。

closeのプレートがかかっている扉に手をかけると、鍵のかかっていないドアは簡単に開いた。途端、大量の鳴き声が聞こえる。

「こんばんはー」

鳴き声に負けなくらいの声を上げ、ささっと中に入ってすぐに扉を閉める。五坪ほどの店内には、十匹の子犬と五匹の子猫がいて、みんながわたしの方を向いて一斉に吠えていた。ちなみに子猫は、毛を逆立ててシャーシャー言っている。

「あんた、営業中には来ないですよ」

眉間にしわを寄せて店の奥から出てきたのは、この店の店長で、わたしの学生時代からの友人でもある菅原晴香だ。

「なんでよ」

「完全な営業妨害よ。可愛い子たちがみんな悪魔みたいな顔になるじゃない」

晴香はそう言い、ケージの中の牙をむく子犬たちに視線を投げた。歯をむき出して吠える子犬たちは、やっぱりケルベロスみたいに見えなくもない。

「仕方ないじゃない。不可抗力よ」

開き直って近寄れば、子犬たちは吠えるのをやめて、後ずさりを始めた。

「雪。あんた、なにかに取り憑かれてんじゃないの？」

「まさか」

反射的に言ったけれど、否定はできない。いや、むしろ取り憑いてほしいくらいだ。それなら、この現象をそいつのせいに行ける。これが自分自身の問題なら、ほんと泣くしかない。

「あれ？ この子見たことないね」

気を取り直してケージに向き直り、隅っこでぶるぶる震えている、一番小さなチワワに目を留めた。

「ああ、今日入った子よ。抱っこする？」

「する！」

晴香がケージを開け、片手に収まるくらい小さなからだを抱き上げる。白と茶色のまじった大きな目のチワワが、震える目でわたしを見ていた。

「か、可愛いっ」

晴香から受け取った子犬を優しく受け取り、きゅっと胸に引き寄せる。チワワはそれほどもう盛大に震えながら、わたしの手にかみついた。がぶがぶと。

「痛い、でもそんなに痛くないっ」

これが成犬なら流血ものだけど、これくらいの子犬ならまだ大丈夫。思う存分子犬の感触を楽しんでいるわたしを、晴香が冷たい目で見つめている。

「あんた、立派な変態よ」

「なんとも言ってる。ああ、可愛いなー。やっぱり犬飼いたい」

「無理無理。雪には金魚がいるでしょ」

「そうだけど、金魚は抱っこできないじゃない」

名残惜しく思いながらチワワをケージに戻し、閉店準備をする晴香を手伝う。

これは、子犬たちを触らせてもらう交換条件みたいなものだ。

本来はわたしもこういう仕事があった。でも、動物のためにもやめなさいと家族や晴香に言われ、渋々あきらめて今の仕事をしている。昔からわたしと同じく動物好きで、けれどわたしとは違って普通に動物に好かれている晴香がペットシヨップを始めたときは、自分のことのように喜んだものだ。

子犬にかまれ、猫に引つかかれながらケージの掃除をする。手が傷だらけになっても、やっぱり可愛い。

「さて、ご飯食べに行こうか」

片付け終えた晴香が言った。

「そうね。お腹空いたわ」

子犬たちにバイバイして、晴香と一緒に商店街の中にある居酒屋に入った。

食べ物を頼み、ビールで乾杯する。

「今日もお疲れ」

「お疲れさま」

晴香がジョッキに注がれたビールを一気飲みした。

「ぷはーっ。やっぱり仕事終わりのビールはうまいっ」

さすがに一気飲みはできないわたしは、半分ほど飲んだところでジョッキを置いた。すかさずおかわりを頼んだ晴香に便乗して、自分の分も追加する。

わたしも晴香もお酒にはめっぽう強い。いわゆるザルというやつだ。顔色も変わらないければ、酔いがまわることもない。

サラダにだし巻き卵、焼き鳥、からあげ。あつという間にテーブルの上がいっぱいになる。

お腹を満たすべく、まずは運ばれてきたキムチチャーハンを小皿によそって食べた。

「あんだ、自分の仕事の方はどうなの？」

焼き鳥のくしを片手に、晴香が言う。

「どうって、ボチボチやってるわよ。新規の顧客もうまくいっているし」

「あれは？ ほら、夏目さん」

「夏目さんねえ……」

夏目さんのことは、以前から晴香に話していた。最初にそれってストーカーじゃないの？ って面白おかしく言ったのは晴香だ。

「四月から同じ部署になりそう」

「えっ、マジで？」

「マジで」

大きく目を見開いた晴香に頷く。

「チャンスじゃない。もう思い切ってつきあっちゃいなよ」

「なんでそうなるのよ!？」

「ここまできたら、もう星のめぐりあわせじゃない。イケメンで背も高く、仕事もできる男なんでしょ？ 今どき、そんなスベックの高いフリーな男なんていないよ？」

「なに言ってるの？」

「多少のストーカー行為には目をつぶりなさいよ、実害はないんだし」

「いやいや。わたしのことをどう思ってるのかもわからないのよ。というか、絶対からかってるだけだと思うし」

「からかうにしては手間がかかってるわよ。嫌われてはいないんでしょ？ だいたい、嫌いならまず話しかけもしないし、ストーカーじみたこともしないわよ。思い切ってアタックしてみなさいよ。それに、ここいらで妥協しないと、あんたももう三十になるのよ。もつと頑張らないと」

「晴香だって同い年じゃない」

「わたしはいいのよ。彼氏だってちゃんといるんだから。雪みたいに枯れてないし」

「か、枯れてって、ひどいじゃない」

「本当のことでしょ。仕事を張り切るのもいいけど、せつかくのチャンスは逃さない方

がいいわよ」

晴香が楽しそうに笑う。とても本気で心配しているようには思えない。夏目さんのことを話したときから、晴香は面白がっているのだ。

「そんなチャンスなんていらないわよ」

どうせなら、動物に触れるチャンスがほしい。ふんと顔をそむけると、晴香がまた笑った。

「わかった。ストーカーって思うから嫌なのよ。ここはもう、『やけに雪に詳しい人』に変えよう」

「……ばかにしてるでしょ」

「してないって。言葉のイメージの問題よ」

「絶対してる」

散々晴香に遊ばれながら、ビールジョッキを九杯ずつ空け、料理もすべてお腹に収まったところで店を出た。自分の店舗の二階に住んでいる晴香と別れ、食後の運動がてら一駅分を歩いて、自分のマンションに帰る。

三階建ての建物には全部で十二部屋あって、わたしは二階の角部屋だ。1DKの単身向けのこの部屋が、わたしのお城ともいえる。

「ただいまー」

玄関を入るとすぐに、四畳半のダイニングキッチンがある。キッチンの真ん中に置いてあるダイニングテーブルに鞆を置いて、奥の八畳の部屋に行った。そこにはベッドと本棚、それと水槽が置いてある。

「ただいま、みんな。おまたせ、ご飯にしようね」

水槽には真つ赤な金魚が七匹泳いでいた。昨年、お祭りの縁日で晴香がすくって、わたしにくれたものだ。まあ、押しつけられたと言えなくもない。

一生懸命お世話をしたからか、みんな結構大きくなった。

それでも、わたしが近づくとささっと水草の陰に隠れてしまう。わたしは魚にも人気がない。

でも、餌箱から餌をつまみ、水槽の上から入れると、七匹がゆつくりと上がってきた。まあ、洪々といったところだけだ。

「美味しい？ むっちゃん」

一番手前に来た子に話しかけると、ふいと奥に行ってしまった。

ちなみに、七匹には名前がある。いっちゃん、にーちゃん、さんちゃん、しーちゃん、ごーちゃん、むっちゃん、ななちゃんだ。もちろん、見分けられてなどいない。適当だ。

金魚たちはパクパクと口を開け、餌を平らげていく。

「おかわりだよー」

もうひとつつまみ餌を入れ、水槽の前で頬杖をついた。

「ねーみんな。わたしって枯れてる？ そんなことないよね？」

問いかけたところで金魚たちが答えるわけもなく、ひたすら餌を食っている。

「別に恋人がいらないわけじゃないのよ。ただ、出会いがないだけ。自分の年齢だつてちゃんとわかってるし。それに今どき、三十歳で独身なんてざらにいるじゃない、ねえ？」

金魚たちに話しかけるようになったのは、いつからだろうか。当然金魚からの答えはないけれど、わたしはこうしてほぼ毎日話しかけている。

もちろん、こんなことはだれにも内緒だ。晴香にすら言っていない。本当におかしくなつたと言われるのがオチだろう。

「晴香に妥協しろって言われたけどさー。そりゃ夏目さんは、世間一般からすれば素敵な人だとは思うよ。でも、どこまで本気なのか、さっぱりわからないんだもん」

餌を食べ終えたいっちゃんたちは、また水草の後ろに隠れてしまった。

「でももっと素直に喜んだ方がいいのかしら。他の女の子みたいに、あの夏目さんに話しかけられちゃった♪ みたいな……。いや、無理よ。わたしそんなキャラじゃないもの」

そこまでして、夏目さんとどうこうなりたいとか、恋人がほしいか思っているわけ

でもない。

「なにを頑張ったらいんだろかね？ 自分がどうなりたいかもわからないのに」  
金魚たちから目をそらすと、お化粧用の鏡に映った自分が見えた。

あんなにお酒を飲んだのに、青白い顔は変わらない。口紅の赤がまるで血のようにも見える。

とりわけて不細工ではないけれど、綺麗きれいということもない、普通の顔。

「訝ぞえない白雪姫……」

わたしが白雪なんてあだ名で呼ばれていることを良く思わない人たちが、陰で言っている台詞だ。

「とりあえず、もっと頑張ろうか、雪」

なにを頑張るのかまだわからないけれど、とりあえず前向きに。

まるで鏡に向かって問いかける魔女のように、わたしはそうつぶやいた。

### 3

四月一日。大幅な人事異動で社内が慌ただしい中、新入社員のための入社式の日を迎

えた。とはいえ、わたしにはあまり関係がない。

いつものように出社して、エレベーターで十階に上がる。扉が開いた瞬間、目の前に棚があった。

「あ、悪い、ちょっと待って」

男性社員が二人がかりで棚を持ち上げ、えっちらおっちら運んでいた。

「だ、大丈夫ですか？」

思わず声をかける。

「うん、あとこれだけだから」

二人はふらふらとした足取りで、通路の奥へ向かっている。よく見れば、あちこちに段ボールや机、椅子といった事務用品が置かれていた。どうやら、異動してきた人たちが早朝から引越し作業をしているようだ。

それらを見ながらシステム課のドアを開けると、パーテーションの位置が代わっている。システム課は、昨日より倍ほどの広さになっている。まだ場所が定まっていないう荷物が脇にたくさん置かれていて、これは、片付けだけで数日かかりそうだ。

荷物をよけつつ、自分の席に向かう。多少配置が代わっていたけれど、わたしの席はほぼそのままの場所にあった。

机の上に鞆を置いたそのとき――



「おはよ、白雪ちゃん」

聞き覚えのある明るい声に、思わずからだが目まぐる。声が出た方にギギギと頭を動かすと、わたしの隣の席に夏目さんが座っていた。

「な、夏目さんっ」

どうして？ と口に出す前に、夏目さんがシステム課に異動になっていたことを思い出した。

「お、おはようございます」

なんとか挨拶の言葉を絞り出すと、夏目さんがにっこりと笑った。

「嬉しいな。これから毎日白雪ちゃんの隣で、仕事ができるなんて。今日からよろしくね」

「……は、はあ。よろしくお願いします」

喜んでいいのか、驚いたらいいのか、自分でもわからない。

にっこりと笑った夏目さんはキラキラと輝いていて、びっくりするほどイケメンだった。まぶしすぎる笑顔に、まともに目を向けることもできない。

ああ、もうっ。まじでイケメン過ぎるのよ。ストーカーなのに、こんなにリアル王子様だなんて。

もっと頑張ろうとか言ったけど、どの方向に頑張ればいいのか、ますますわからなくなる。軽いめまいを覚えながら席に座り、ちらりと隣を見ると、夏目さんの机のまわりにも段ボール箱がたくさんあった。机の上にも荷物があり、夏目さんがせつせと片付けている。まわりを見渡してみても、みんながそれぞれ片付けをしているようだ。

「て、手伝いましょうか？」

一人いたたまれなくなったわたしは、多分初めて自分から夏目さんに声をかけた。

「ほんとに？ 助かるよ。ありがとう」

夏目さんがまた綺麗な笑顔を見せた。思わずドキッとする表情。なんかもう、流されてもいいんじゃないかと思ってしまう。

でも、お手伝いにと開けた夏目さんの段ボール箱の中に見慣れたペンを見た瞬間、そんな思いはシュルシュルと消えた。

それは一本の黒いボールペン。会社からの支給品で、どこにでもあるありふれたものだけど、軸にまかれた猫柄のマスキングテープは、わたしが目印にと貼ったものだ。

同じボールペンを何本ももっているから、失くしたことに気づかなかった。まさか夏目さんがもっていたとは……。どうしよう、聞いた方がいいのだろうか。でも、なんだかいろいろ怖い。

結局わたしは、片付けるふりをしながら、そのボールペンをこっそり自分の机の中に

戻した。

その後も、なにが出てくるのかと恐る恐る箱を開けていったけど、結局あのボールペン以外に怪しいものは出てこなかった。

「ありがとう。助かったよ」

三十分ほどかけて、片付けは終わった。夏目さんの席まわりはだいぶすつきりとして、たくさんあった荷物もきっちり収まっている。元々几帳面なタイプのようなのだ。

「いえ、どういたしまして」

「お札に今度ごちそうするよ」

「お、お気持ちだけで十分です」

これ以上お近づきになるのはちょっと、いやかなり怖い。ふるふると首を振ったそのとき――

「えーっ、もう片付け終わっちゃったんですか？」

そばで大きな声が聞こえた。パツと振り向くと、派手な顔立ちの美人が立っている。わたしと同じシステム課の先輩、秋庭亮子さんだ。秋庭さんは以前から夏目さんのファンであることを公言していて、今回の彼の異動を最も喜んでいたのも彼女だった。

「せっかくお手伝いしようと思ってたのに」

秋庭さんは残念そうに赤い唇を尖らせ、夏目さんに詰め寄る。

「ああ、ありがとう。白雪ちゃんが手伝ってくれたらから、早く終わったんだ」

ね、とわたしに笑いかけるけど、そういうの、まじでやめてほしい。

ほら、秋庭さんが般若のような顔になったじゃない。

「と、隣の席なので」

言い訳を述べようとしたけれど、隣という言葉に、秋庭さんの頬がさらにびくりと動いた。

「随分、仲良しですね」

言葉の端々から棘が出てきているのがわかるくらいだ。それなのに、夏目さんは能天気な笑う。

「そう見えるなら光栄だね。ね？」

だからそれ、本当にやめて。

秋庭さんは夏目さんの大ファンなのよ。

わたしは今まで本当に地味に生きてきた。それこそ、そこにいるのかいないのか、わからないくらい地味に。なのに夏目さんのせいである種有名人になってしまったことは、本当に不本意だ。

秋庭さんは美人で華やかで、いつもおしゃれな女の子たちの中心にいる。つまりわたしとは正反対だ。だから、何年も同じ部署にいるのに、こうして秋庭さんとばっちり顔

を合わせたのも初めてだと思う。

そういう集団が昔から苦手だったこともあり、極力お近づきになりたくないと思っていたから、今までもあえて顔を見ないようしてきたのに。夏目さんのせいで台無しだ。秋庭さんがわたしを品定めするみたいになじつと見ている。それこそ、足の先から頭のとっぺんまで、視線を走らせているのがわかる。

そしてまじまじとわたしの顔を見つめて……フンと鼻を鳴らした。

あ、ばかにされた。多分、きつと。

「これからは同じ部署だし、わからないことはなんでもわたしにきいてくださいね、夏目さん」

「ありがとう」

秋庭さんは夏目さんにとびきりの笑顔を見せ、最後にわたしをジロツと睨みつけると、自分の席へと戻っていった。

ああ、絶対敵認定された。

これでもし意地悪とかされたら、間違ひなく夏目さんのせいだからねっ。

心の中で悪態をついていると、まただれかが近くに来た気配がした。パツと目を向けると、鈴木さんがぼうつと立っている。

「す、鈴木さん。おはようございます」

「おはよう、白崎さん。今日からここに異動になったんだ。よろしくね」

「え、そうなんですか？　こちらこそよろしくお願いします」

鈴木さんは頷くと、ふらりと離れていった。

鈴木さんも異動なんだ。内示に名前あったっけ？

あんなにまじまじと見たはずなのに、記憶がない。夏目さんのインパクトが強すぎて、気がつかなかったのかもしれない。

申し訳ないなと思いつつも、微妙な気持ちだ。

「随分、仲が良さそうだね」

ため息の一つでも出そうになったとき、隣から声が聞こえた。見ると、夏目さんが目を細めてこつちを見ている。さっきの秋庭さんとおんなじ台詞に内心驚いた。

「え？」

「鈴木とは知り合いなの？」

「知り合いと言うか、一度一緒にお仕事をさせてもらったくらいで……」

「一回でそんなに仲良くなる？」

「……仲良さそうに見えますか？」

挨拶だけなの？

「僕にはね」

「そうですか……」

「こんなことになってるなら、もっと早く異動しておけば良かった」

「は？」

「まあいいや、挽回挽回」

夏目さんは一人納得したように、うんうんと頷いた。

……なんか、まためまいがしてきそうだ。

結局、部署内が落ち着いたのはお昼近くだった。多少の荷物は残っているけれど、大部分が片付いたと言えるだろう。そのタイミグで、部長がみんなを集めた。

「朝からご苦労さま。今日から営業一課の一部とシステム課が合併することになりました。今後は、営業とシステムとでペアを組んで仕事をしてもらいます。ペアについてはこちらで検討しました。各自、書類を見て確認してください」

部長がそう言い、全員に紙が配られた。今回の異動を受けて改めて作られた名簿だ。二枚目には、さつき部長が言ったペアの割り振りが書かれていた。

わたしはだれとだろうと、一番上から順番に見ていく。

「白雪ちゃん、一緒だね！」

すぐ後ろから声が出た。驚いてちよつと飛び上がりそうになる。そんなわたしの様子を気にせず、夏目さんは後ろから、わたしがもっている紙を指さした。

「ほら、ここ見て」

あら、夏目さんって指も長くて綺麗……って、じゃなくて！

異常にからだに近いのを気にしつつ、夏目さんが指さした先を見ると、そこには「営業、夏目祐斗、システム、白崎雪」と書かれていた。

まさかこんなことが……

「またまたよろしくね、白雪ちゃん」

「よ、よろしくお願います」

「じゃあ早速打ち合わせしちゃうか。会議室借りまーす」

夏目さんはだれにもなくそう言うのと、わたしの腕を取って、会議スペースの一室に向かった。

途中、秋庭さんにめちゃくちゃ睨まれ、鈴木さんには驚いた顔をされたけれど、わたしのせいじゃないから。

会議スペースには、パーテーションで区切られた小会議室がいくつもある。それぞれの中は、テーブル一つに椅子が四脚ととてもコンパクトだ。

そんな狭いスペースに、ストーカー、いや夏目さんと二人きりなんて。

「さ、座って白雪ちゃん」

夏目さんがにこにこ椅子をすすめる。とりあえず入り口に一番近い椅子に腰かける

と、夏目さんが隣に座った。

えっ、前じゃなくて横？ 普通隣に座る？ 打ち合わせなら前でしょ、向かい合わせでしょ？

軽く頭の中がパニックになる。それも当然だ。

ここは事務機の隣同士とはまた違う、さらに近い距離感なのだ。

そんな間近で見る夏目さんは、やっぱりイケメンだった。軽くウェーブのある茶色い髪は柔らかそうで、思わず手を伸ばしたくなる。

あらいやだ。そんなことしたら、わたしの方が変態だ。

わたしの内心にお構いなく、夏目さんはもってきたファイルから書類の束を取り出した。

「今度ね、ここに営業に行こうと思ってるんだ」

夏目さんが示す書類には、現在建設中の商業ビルの名前があった。

「店舗と居住区に分かれていて、一日の集客数もかなりのものになるらしい。ここを取れば、大きいと思うんだよね」

生き生きと語る夏目さん。意外にも普通に仕事の話をしている。

いや、もう本当にごめんなさい。てっきりなにかされちゃうかと……  
すぐに頭の中を切り替え、渡された書類を真剣に見つめる。

「先方に何うのはいつですか？」

「アポは来週の金曜日にと取ってる」

「では、それまでにシステムの提案を考えればいいわけですね」

「うん。大丈夫そう？」

「提案だけなら、問題ありません」

まだ具体的な設計図もないので、細かいシステムまでは考えられない。逆に、自由になんでも提案できるという意味だから、そう難しくはないけれど。

「さすがは白雪ちゃん。頼もしいな」

夏目さんは笑いながら、次の書類を渡した。

「これはね、僕が最初に営業にまわった会社。そのときのシステムに最近不具合があって、全面的にやり直したいと思ってるんだ」

「なるほど」

「ここは今日の午後に行くから、一緒に行行って見てくれる？」

「わかりました。ではそれまでに設計図見直しますね」

「よろしく。全部の資料はここにまとめておいたから、目を通しておいて。他にもあるんだけど、この二件が急ぎなんだ。あ、それから、この辺の資料とか営業内容は、上司以外には他言無用だよ」

「わかりました」

会議室から出て自分の席へと戻る。当然、隣なので夏目さんも一緒だ。じゃあ最初からここでやれば……とも思うけれど、セキュリティ関連のものは同じ会社内であっても基本的には担当者以外秘密なのだ。

「ちよつと営業部に、忘れ物取ってくるね」

「あ、はい。どうぞ」

夏目さんが席を立て出ていった。その間に、受け取った書類に目を通す。それは結構な量で、ぱらつと見ただけでもかなり細かいけど、わたしのために作られたであろう資料はともわかりやすかった。

さすがは他社からヘッドハンティングされてきただけの人だ。営業部でトップになったのも頷ける。

彼の仕事面はほとんど知らなかったから完全に変な人扱いしていたけど、これは見直すべきよね。やつぱりストーカーっていうのも、言い過ぎかもしれない。

ああ、なんか自分が恥ずかしいわ。

気を取り直して資料を読み込む。しばらくしたところで、夏目さんが戻ってきた。その表情がなんだか曇っている。

「忘れ物、ありましたか？」

「いや、なかった。どこに行っただろう……」

しょんぼりしている夏目さんなんて初めて見た。こんな顔することもあるんだ……

「なにがないんですか？ 探しましょうか？」

「ペンなんだ、ただの黒いボールペン。大事にしてたのに」

「……ペン？」

もしかして、猫のマスキングテープの？ とは怖くてきけない。思わず机の引き出しを手で押さえてしまった。

「よ、良かったらわたしのをお貸ししましょうか？ たくさんもってますから」

ちよつとの動揺を覚えつつも、このまま放っておけなくて、引き出しを開けて同じようにマスキングテープがまかれたペンを夏目さんに渡した。それは偶然にも、さつき夏目さんの荷物から回収したペンだった。

「え、いいの？」

夏目さんの表情がパツと明るくなる。

「ええ、まあ」

「助かるよ。これで……しなくてもいいし」

え？ 今ちよつとなにか言ったよね？ 聞き取れなかったけど。

でもわたし、ばかなの？ せっかく取り戻したペンを返してどうするのよ。いや、

黙ってもっていられるよりはましか。

もはや自分の思考回路が正常かどうか、わからなくなっている。

そんな葛藤も知らず、夏目さんはわたしから受け取ったペンをご機嫌でスーツのポケットに差した。

微妙な気持ちのまま、午後には夏目さんと顧客先に出かける。出かける間際、秋庭さんにごい目で睨まれた。

ちなみに秋庭さんがペアになったのは、あの鈴木さんだった。ゴージャスと平凡。男女が逆だけど、わたしたちと同じような組み合わせだ。

絶対嫌がらせとかされそう。会社に戻ってくるのが怖い……

「白雪ちゃん、こっちこっち」

気もそぞろに正面玄関に向かおうとしていたわたしを、夏目さんが引き留めた。

「今日は車で行くから」

夏目さんはそう言うと、会社の地下にある駐車場に向かう。そしてたくさん停まっている車の中から一台の軽自動車を指差した。

「さあ乗って」

「はい」

返事はしたものの、実際に乗り込むことには躊躇してしまう。もしかして、このま

まどこかに連れていかれる……なんてことはないよね？

「どうしたの？」

運転席に乗り込んだ夏目さんが、不思議そうな顔でわたしを見る。

「あ、いえ、大丈夫です。いきましよう！」

覚悟を決めて助手席に乗り、シートベルトを締めた。車がなめらかに動き出す。

「白雪ちゃんと一緒にまわるのって初めてだよね？」

「そうですね」

「今まで全然一緒に仕事できなかったもんね」

「夏目さんは、まだいらして間もないですから」

「そうだね。半年くらいかな」

運転を続けたまま、夏目さんが言った。ちらりと見ると、真剣に前を向いている。そんな横顔ももちろんイケメンだ。

うちに来てまだ半年か。それなのに、彼はすでにたくさんのお客様を得ているようだ。

「それまではなにをされていたんですか？」

「お、嬉しいな。白雪ちゃんから質問してくれるなんて。えっとね、車のディーラーで営業やってたんだ」

「へえ」

初めて知った。でもやっぱり前も営業だったんだ。

「ヘッドハンティングですよね？　すごいですね」

「いやあ、まあ偶然っていうのかな。芳野よしのの新社長が車を買うのにうちの店に来てね、僕が担当になったんだ。で、あれこれやってるうちに、来ないかって言われてね」

なんと、社長チーフ自らヘッドハンティングしたのか。

「それは、本当にすごいですね」

「いや、すごいつていうか、タイミンクの問題かな。社長は社内の体制を変えようとして、新しい風がほしかった。僕は僕で、他の仕事をしてみたいなど思っていたから。迷ったけど、結果良かったかな。白雪ちゃんと出会えたしね」

夏目さんがちらっとわたしを見て、そして片目を閉じてウインクした。

ほわあっ。

イケメンのウインクは破壊力がすごすぎる。漫画みたいに、ズキーンと胸を撃たれた気分だ。

本当にかっこいい。それは素直に認めよう。そんな人からの好意……のようなものを素直に受け入れられないのは、相手がストーカーチックだからか、自分に自信がないからか。多分、後者の割合の方が大きいかもしれない。

夏目さんとわたしは、まったく釣り合わない。そんな思いが常に前提にあるから、あ

る種この距離感を維持できている気がする。

車を三十分ほど走らせたところで、夏目さんがコインパーキングに車を停めた。

「さあ、行こう」

夏目さんと一緒に、高層ビルが立ち並ぶ道を歩き、大きな建物の前で足を止めた。ビルには、先ほど資料で渡された企業名が書かれている。世界レベルで有名な、大企業だ。

夏目さんは慣れた様子で正面玄関を抜け、受付嬢のところまで行った。すでに彼は有名な人なのだろうか、受付の女の子が、通常の三倍くらい笑顔を見せている。

うん、まあ、イケメンだもんね。そりゃ、あちこちで人気者になるわよ。

案内された通路を歩いていくときも、どこからか女の子たちが集まってきて、遠巻きに夏目さんを見ていた。

なんか、すごいな……

夏目さんの人気に圧倒されつつ、通された会議室で先方の担当者と初めて顔を合わせた。

「彼女は、うちのシステム担当です」

「初めまして。白崎です」

名刺を渡すと、やっぱりいつもと同じようなりアクションを返される。

「へえ、白崎雪さん。随分色白なんですね」



「ええ、昔からなんです。具合は悪くないんですけど」

「白雪姫だね」

担当者が笑う。これもまた、いつものことだ。

けれど、続いた言葉がいつもとは全然違っていた。

「それを言っているのは僕だけです」

突然そんなことを言い出した夏目さんに、わたしも担当者さんもぼかんと口を開ける。

「僕だけの白雪姫なんです」

真顔でそう言った夏目さん。その顔には、いつもの愛想良さの欠片かけらもない。思わず息を呑んだそのとき、夏目さんがふっと頬を緩ゆるませた。

「なんてね。冗談ですよ」

「なんだ。びっくりしたよ、夏目くん」

担当者さんは笑い出したけど、わたしは笑えなかった。

いや、ちょっとまじだったでしょ。今でも目が笑っていない気がする。

わたしの若干のモヤモヤをよそに、その後の打ち合わせは順調に終わった。夏目さんが用意してくれた資料のおかげもあって、再構築の提案はあっさり了承をもらえた。

さすが優秀な営業マンらしく、彼は顧客との信頼関係もばっちりだ。たった一か所、一緒に行っただけで、彼の優秀さがよくわかった。

すごいと思う反面、ストーリーカーチックな部分が返す返すも残念でならない。それにしても、社外であんな風に言われるとは思ってもみなかった。まさか本気で……なんて思いかけた気持ち、頭を振って否定する。なんでも規格外の夏目さんのことだ。彼の行動は、凡人にはまったく理解できないだろう。

「あー、無事に終わって良かった。さすがは白雪ちゃん、よくあんな短時間で再構築のアイデアを出せたね」

「いえ、夏目さんの資料が良かったんですよ」

車に乗り込みながら、そんな話をする。

夏目さんは最新の防犯システムや他社のシステムも熟知していて、帰りの車で議論を交わすのは、なかなか楽しかった。

「良かったら、今夜ご飯でも行かない？ ペアになったご挨拶あいづつがてら」

そう言われたのは、会社の駐車場だった。

「す、すみません。今夜は予定があつて」

特に予定なんてないのに、とっさにそう答えてしまう。

「そっか。残念。じゃあまたね」

「はい」

なんて、言ってしまったけど、次はなんて言って断ろうか。

だって、やっぱり無理よ。  
 ストーカー的なところはさておいて、夏目さんとわたしは釣り合わない。それにも一緒に食事に行ったことが秋庭さん辺りにばれたら、命さえ危うい。わたしはもつと、地味に生きたいのだ。

残念だなと繰り返し返す夏目さんをさくつと無視して、システム課に戻る。終業時刻までは、片付けを手伝ったり、資料を読み込んだりして忙しく過ごした。定時を過ぎたら、夏目さんに話しかけられる前にさっさと帰り支度をして、いつも通り晴香の店に向かった。

子犬から歓迎せざる挨拶を受け、今日は子猫を抱かせてもらう。小さな猫はまだ爪が柔らかいので、引つかかれてもあまり痛くない。

「へえ、夏目さんと隣同士なんだ」

「そうよ、おまけにベアになっちゃったし」

閉店準備をしている晴香のそばで、子猫に生まれ、ガリガリと爪を立てられながらもよしよしと小さなからだを撫でる。手が血まみれになりそうだ。

「部署異動もベアの件も、もしかしたら夏目さんが手をまわしたのかもね」

「まさか」

「だって、社長自らヘッドハンティングしてきた逸材でしょ？ 多少の我儘や希望は通

るんじゃない？」

言われてみれば、その可能性もなくはない。なくはないけど、あそこまで大掛かりなことが、個人の希望でできるだろうか？

それでも、絶対に違うと言いつれないのが怖いところだ。

「もうこれはまさしくチャンス到来じゃない」

「チャンスって……」

「今までは、まあ変なところしか見てなかったけど、これからは夏目さんの優秀な部分をどんどん見られるわけですよ？ 雪は端から夏目さんが自分に恋愛的好意をもっていると思ってないみたいだけど、やっぱり人って、好意もない相手を知りたいとは思わないんじゃない？ それに、ストーカー要素を凌駕するくらいすごい人なら、多少の残念な部分には目をつぶれるでしょう」

「どんな持論よ、それ」

「完璧な人間はいないってことよ。だれにでも欠点はあるんだから」

「なるほどね」

ストーカー的要素は欠点に入るんだらうか……

「そもそもだけど。別にわたし、そんな王子様みたいな人ときあいたいなんて、微塵も思っていないんだけど？」